

もえちゃんともみの木き

みなさんは、なか市にある植物園しよくぶつえんを知っていますか。とても広くて、たくさんひろのきれいなお花はなやめずしい植物などがあるところですよ。今日きょうも、そんな植物園で、ふしぎなできごとがおこりました。

「植物園に行ってくるね。」

もえちゃんは、元気げんきにげんかんをとび出だします。もえちゃんは、一年生いちねんせいのときに遠足えんそくに行いってから、植物園がすっかり好きになってしまいました。

「えっ、また……。あなたのお花には、ちゃんとお水をあげたの？」

お母さんかあの声こえが遠くから聞きこえます。『帰かえってきてきたらね。』先月せんげつ自分で作つくった花かだんをよこ目で見みながら、もえちゃんは心こころの中でつぶやくと、風かぜのように通とおりすぎました。

「だって、おうちのお花はお話はなししてくれないもの……。」

「こんにちは！」

顔見知りになったうけつけのおばさんにあいさつをして、入り口をくぐります。夏の青空が広がるとても気持ちのよい日です。しんこきゆうをするど、花や木などのしぜんのかおりがいっぱい。もえちゃんはうれしくなりました。そして、お気に入りのもみの木の下ベンチに、ストーン、とこしを下ろすと、目をとじて大きく一つ、いきをすいこみました。

「今日は、どんなお話しが聞こえるだろうか？」

「おおい、おおい！」

いつもとはちがう、大きくてはりのある声がします。もえちゃんあたりをきよろきよろ見たして、最後にもみの木を見上げました。

「もみの木さん？」

もえちゃんはちよつとびっくりして、もみの木を見上げます。

「遠足のときに、だるまさんがころんだをいっしょにやったから、もえちゃんにはぼくの声が聞こえるんだね。」

「ええ、そうよ。でも、おうちのお花は何もお話ししてくれないの。」

「そうかな？それはもえちゃんが、聞こうとしていないからじゃないのかな。」

もえちゃんは、ふしぎそうな顔をして、目の前の<sup>まえ</sup>花だんの花たちを見わたしました。

「今日も気もちがいいわね。お水もたくさんもらえたし、お日さまもきら

きら。その上、草<sup>くさ</sup>もなくてフワフワ土のベットよ！」

お花たちの声に、もえちゃんははっとしました。もみの木が、「ここのお花も、もえちゃんのおうちのお花たちも同じ。耳をすませば、きっとお花の声が聞こえるはずだよ。」



と言って、声が遠ざかっていきました。



いっしゅん、今までかいたことのない、とてもよい花のかがりがありました。そして、ヒユウーとあたたかい風がふき、目の前の花たちは、夏の風をうけながら、ただゆらゆらゆれているだけでした。

「今日は早くおうちに帰らなきゃ。」

もえちゃんは、少しはずかしそうに一人ごとを言って、植物園の出口の方へ走り出しました。